

第3章 史跡由義寺跡の概要および現状と課題の整理

第1節 指定の状況

(1) 指定の状況

名称：由義寺跡

種別：史跡

指定年月日：平成30（2018）年2月13日 【文部科学省告示第23号】

指定基準：三 社寺の跡又は旧境内その他祭祀信仰に関する遺跡

（特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準）

区画整理後の地番（令和元（2019）年12月20日）

所在地	大阪府八尾市東弓削三丁目
地域	1003番、1004番、1010番、1011番、1012番、1013番、1014番、1015番、1016番、1017番、1018番、1019番、1020番

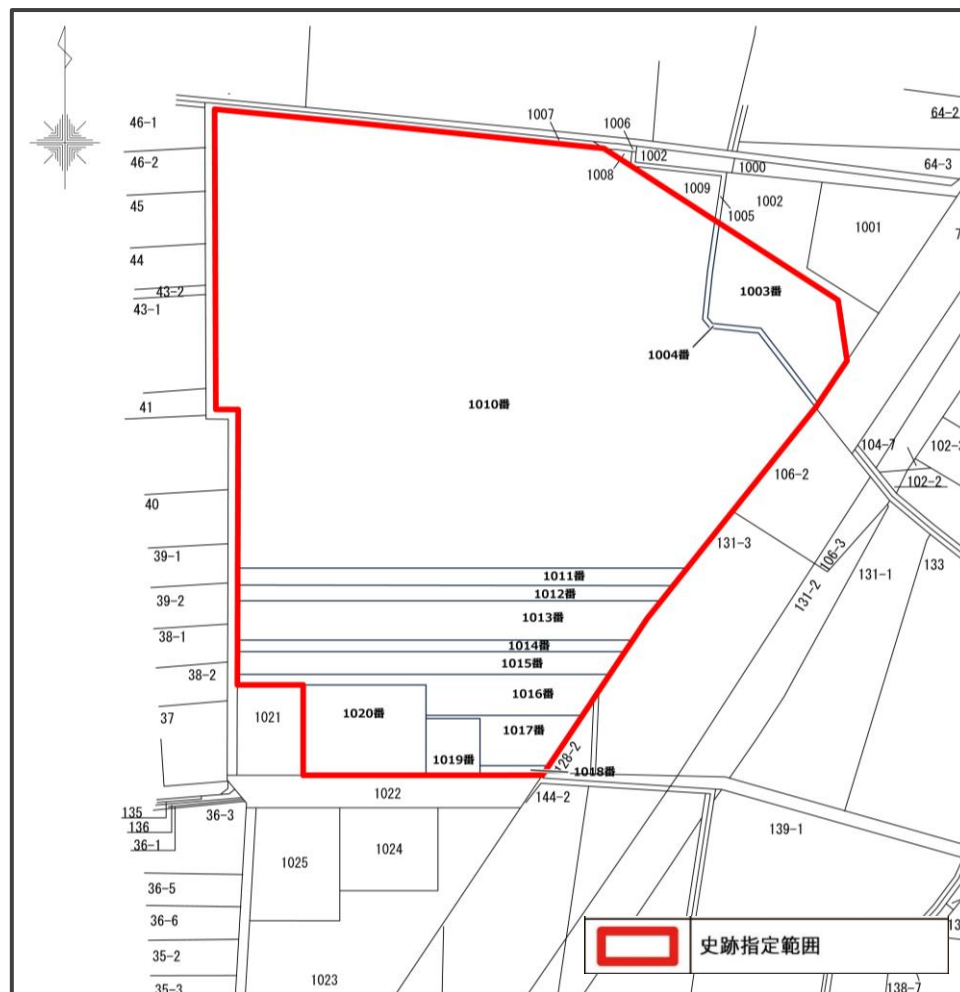
指定範囲：10485.93 m²（実測）（地目）：田 105.00 m² ・ 宅地 9,958.93 m² ・ 雑種地 381.00 m² ・ 用悪水路 41.00 m²

図3-1 史跡由義寺跡の指定範囲：区画整理事業後

史跡指定にあたり、平成 29 (2017) 年 11 月 17 日に行われた国の文化審議会文化財分科会の審議・議決を経た文部科学大臣に答申された由義寺跡の評価は下記のとおりである。

(月刊文化財 平成 30 (2018) 年 2 月号抜粋 横書き用に表記の一部を改め)

由義寺跡は、生駒山地西側の旧大和川が八尾市二俣で分流する玉串川と長瀬川に挟まれた沖積地上に位置する古代寺院跡である。この付近は、弓削道鏡の出身氏族である弓削氏の本拠地と考えられている。付近に「大門」、「古宮」、「古屋敷」といった地名が残り、その付近では奈良時代の瓦が出土することから、天平 14 年 (742) 12 月 30 日の「弓削寺僧行聖優婆塞貢進解」などに寺名が見える弓削寺の推定地とされていた。弓削寺は『続日本紀』天平神護元年 (765) 10 月 30 日条及び閏 10 月 1 日条に称徳天皇の行幸、礼仏と食封 200 戸の施入の記事がみえ、宝亀元年 (770) 4 月 5 日条に「由義寺塔」の造営に係る記事がみえる。また、神護景雲 3 年 (769) 10 月 30 日に由義宮を中心とした地域を西京としたことが知られる。なお、由義宮は天平神護元年までは弓削行宮とされていたが、神護景雲 3 年 10 月 17 日の行幸からは由義宮と記載されている。弓削寺も宮の改称とともに、由義寺に改められたと考えられる。

平成 28 年度に八尾市東弓削で計画された東部大阪都市計画事業曙川南土地区画整理事業に伴う発掘調査を、(公財)八尾市文化財調査研究会が実施したところ、東大寺式や興福寺式の軒瓦を含む瓦が集中して大量に出土した。この成果を受けて八尾市教育委員会は、瓦の集中地点を中心に遺跡の内容確認のため発掘調査を実施したところ、大規模な塔の基壇を検出した。塔基壇は、基壇外装は残っていないが、延石の抜き取りと考えられる凝灰岩片を含む溝が四方に巡ることから 1 辺約 20m の規模であることが判明した。これは、諸国の国分寺の規模をしのぎ、大安寺の七重塔の規模に匹敵する。

また、基壇は粘質土と砂質土に薄い層を交互に突き固めた版築工法で築かれ、最も残りのよい部分では高さ約 70 cm である。心礎をはじめとする礎石が失われているため、柱の位置や数、柱間寸法は不明だが、塔廃絶後に基壇上面に掘り込まれた後世の土坑から、四天柱又は側柱の礎石の可能性のある巨石や円柱座を持つ礎石が出土している。なお、この土坑からは塔の地鎮具と考えられる和同開珎や萬年通宝、神功開宝などの銭貨、佐波理鋇の破片なども出土した。

基壇周辺から出土した大量の瓦の中には、東大寺式と興福寺式の軒瓦が多数含まれている。また、瓦とともに相輪の一部である伏鉢もしくは請花の可能性のある復元直径約 90 cm の銅製品が出土している。出土した軒瓦は奈良時代後半のもので、塔基壇の規模が官の大寺に匹敵すること、この地が「由義寺」の推定地にあたることから、由義寺の塔跡である可能性が極めて高いことが明らかになった。また、大阪平野ではこれまで出土していない東大寺式と興福寺式の軒瓦が採用されていることは、『続日本紀』宝亀元年 4 月 5 日条にみえる「詔して、由義寺の塔を造りし諸司の人、及び雑工等九十五人に、労の軽重に随ひて、位階を加え賜ふ。」という記事から分かる官造営機構の動員を裏付けるものと評価される。さらに、塔周辺では同時期の他の建物は検出されておらず、これは宝亀元年 8 月 21 日に道鏡が造下野国薬師寺別当として左遷され失脚することから、発掘された塔跡は由義寺のものであると考えられる。

由義寺跡は、弓削氏の氏寺として成立するが道鏡の台頭によって、奈良時代後半には西京における官寺として塔の造営などの整備が行われたと考えられる。こうした由義寺の動向は、奈良時代後半における政治・社会情勢を反映しており、称徳天皇と道鏡による政策を知る上でも重要である。よって、史跡に指定して保護を図ろうとするものである。

(2) 指定地の状況

- ①土地所有：史跡由義寺跡は、史跡指定地全域が八尾市の所有となっている。
- ②管理団体：平成 30 (2018) 年 7 月 30 日付文化庁告示第 68 号により、八尾市が指定。

第2節 史跡由義寺跡の調査成果

(1) 文献にみる由義宮・由義寺 (表3-1 参照)

由義寺に関連する最も古い記録としては、前身寺院に位置づけられる弓削寺が「優婆塞貢進解」(『大日本古文書』巻2・324頁)において、天平14(742)年に弓削寺の僧・行聖が、優婆塞の得度(在家修行者を正式の僧にすること)を申請したものがある。これにより弓削寺が8世紀前半には存在していたことがわかる。

以降、『続日本紀』によると、天平神護元(765)年10月に称徳天皇が紀伊行幸の帰途、弓削行宮に入った際、弓削寺に2度礼仏し、唐楽、高麗楽の演奏や黒山舞、企師部舞等が行われている。さらに食封200戸を与える等、寺を厚く遇している。

次に称徳天皇が河内を訪れたのは神護景雲3(769)年10月、宇佐八幡神託事件の翌月であった。23日間の滞在で、弓削行宮ではなく、由義宮への行幸であった。弓削寺に関する記述はなく、寺院としては龍華寺の記述がある。ここで市を開き五位以上の官人の売り買いを見物し、難波宮の綿20,000屯と塩30石を龍華寺に施入した。そして、「由義宮を以って西京と為し、河内国を以って河内職と為す。」として由義宮(西京)の位置づけを宣言した。「西京」とは、保良宮を北京としたことを意識して、平城京の西に位置することから称したものであった。宮の名称の変更については、氏族名の「弓削」の文字ではなく、好字である「由義」の文字を用いたのだろう。また、弓削寺も宮と同じく「由義」にこの時に変更された可能性が高い。

由義宮の範囲は、神護景雲4(770)年正月の条に、大県、若江、高安郡の百姓の宅で、由義宮に入るものはその価を支払うとあり、一定の範囲が特定できる。また、河内国のうち大県郡、若江郡の田租と安宿郡、志紀郡の田祖の半分を免除していることから、安宿郡、志紀郡についても西京の範囲としての検討が必要である。

称徳天皇の最後となる神護景雲4年2月の行幸は、39日間におよんだ。3月には、称徳天皇が主催し、河内の渡来系氏族の葛井・船・津・文・武生・蔵の六氏の男女230人が参加した歌垣が行われた。この時に「西の都は万世の宮」と西京の永遠の繁栄が歌われた。この歌垣の終わりに河内大夫(河内職の長官)の藤原雄田麻呂(のちの百川)が和舞を奏した。そして4月、由義宮から平城宮に還御する前日に由義寺の塔の造営に携わった人々に対して、位階を授けた。この記事によって、由義寺は塔を有する寺院であったことがわかる。

位階を授けた翌日、称徳天皇は平城京に戻り、その4か月後に亡くなる。その結果、道鏡は下野薬師寺の造寺別当に任じられて下野国に向かうことになる。河内職は河内国に戻され、西京の造営は中止になったとみられる。

その後の由義寺の様相は明らかではないが、塔は、出土した瓦の種類等から、建立後、長期間維持されていたとは考えにくく、発掘調査の状況からは早い時期に火事等で焼け落ちてしまった可能性が高い。一方、文献史料によると、鎌倉時代まで寺院(「弓削寺」とある)が存続していた可能性があるが、その後いつしか廃絶したとみられ、その場所すらもわからなくなったようである。

表 3-1 由義寺関連年表

天皇	西暦	年号	月	おもなできごと
元正	718	養老2	-	阿倍内親王(のちの孝謙・称徳天皇)が生まれる
聖武	742	天平 14	12	弓削寺の僧 行聖が得度(出家)者を推挙する【弓削寺の初見】
	747	天平 19	6	「沙弥道鏡」が東大寺の僧・良弁の使者となる【道鏡の初見・正倉院文書】
孝謙	749	天平勝宝元	7	阿倍内親王が即位する(孝謙天皇)
淳仁	758	天平宝字2	8	孝謙天皇が譲位し、大炊王が即位する(淳仁天皇)
	760	天平宝字4	3	萬年通宝を鑄造する
	761	天平宝字5	10	保良宮(滋賀県大津市)に孝謙太上天皇が行幸し、看病にあたった道鏡を信頼する
	762	天平宝字6	5	孝謙太上天皇が法華寺に入り、出家する
	763	天平宝字7	9	道鏡が少僧都になる
	764	天平宝字8	9	西大寺(奈良県奈良市)建立を発願する／藤原仲麻呂の乱の後、道鏡を大臣禪師とする
称徳			10	淳仁天皇を廃し、孝謙太上天皇が重祚する(称徳天皇)
			9	神功開宝を鑄造する
	765	天平神護元	10～ 閏 10	称徳天皇第1回目の河内国への行幸:5日間 10月29日 紀伊国への行幸の帰り、弓削行宮に入る 10月30日 弓削寺で仏を礼拝する 閏10月1日 弓削寺に食封200戸、智識寺に50戸を施入する 閏10月2日 道鏡を太政大臣禪師に任じ、文武百官に拝賀させる／弓削寺で仏を礼拝する 閏10月3日 大県・若江郡の調・租を免じ、平城宮への帰途につく
			閏 10	平城宮で留守百官が道鏡を拝賀する
	766	天平神護2	10	道鏡を法王とする
	768	神護景雲2	2	弓削浄人(道鏡の弟)を大納言とする
			1	平城宮西宮で大臣以下が道鏡を拝賀する
			5～9	宇佐八幡神託事件
	769	神護景雲3	10～11	称徳天皇第2回目の河内国への行幸:23日間 10月17日 由義宮に行幸【由義宮の初見】 10月21日 龍華寺の西の川辺に遊覧し、同寺に難波宮の綿・塩を施入する 10月30日 由義宮を西京とし、河内国を河内職にする 11月9日 平城宮にもどる
	770	神護景雲4	1	由義宮の範囲に家がある大県・若江・高安郡の人々に補償を行う
			2～4	称徳天皇第3回目の河内国への行幸:39日間 2月27日 由義宮に行幸する 3月3日 博多川のほとりで宴をおこなう 3月28日 葛井・船・津・文・武生・蔵の六氏の男女230人の歌垣がおこなわれる 4月1日 造由義大官司の次官を任命する 4月5日 由義寺の塔の建設に伴い、諸司の人・雑工ら95人に位階をあたえる【由義寺の初見】 4月6日 平城宮にもどる
			7	志紀・渋川・茨田などの堤を修造する
			8	4日 称徳天皇が平城宮西宮で亡くなる 17日 称徳天皇、高野山陵(奈良県奈良市)に葬られる 21日 道鏡を下野薬師寺(栃木県下野市)の造寺別当に任じて発遣する 22日 弓削浄人らが土佐国(高知県)に流される 26日 河内職を河内国にもどす
		宝亀元	10	白壁王が即位する(光仁天皇)
光仁	772	宝亀3	4	道鏡、下野で亡くなる
桓武	781	天応元	6	弓削浄人らが赦免され、河内国若江郡に戻る
	800	延暦 19	2	河内国若江郡の田が龍華寺に施入される(『類聚国史』)
後朱雀	1038	長暦2	6	弓削寺が醍醐寺領となる(『醍醐雜事記』)
土御門	1207	建永 2	7	河内国通法寺の所領(末寺)として龍華寺(字弓削寺)とある(『河内国通法寺領注文案』)

（２）周辺における発掘調査の成果

（公財）八尾市文化財調査研究会による平成 27～30（2015～2018）年の、塔基壇発見の契機となった区画整理事業に伴う発掘調査は、都塚 1～4 丁目、柏村町 3 丁目、東弓削 3 丁目、大字刑部、大字都塚、大字東弓削、大字二俣の範囲約 20ha（20 万㎡）の範囲に及ぶ（調査区は A～C 区と呼称：図 3-14・表 3-2 参照）。

この調査では、南北に通じる大阪外環状線を東西の境にして、西側調査地（C 区）での大量の奈良時代後期の瓦の出土を端緒とした塔基壇の発見があったが、東側調査地（B 区）においても奈良時代の遺構や遺物が多数確認されている。掘立柱建物（図 3-2 左）や、由義宮の造営に関連して資材等を運搬したと考えられる南北方向の大溝（図 3-2 右・図 3-3 左）や船着場と考えられる石組み（図 3-3 右）を検出するなどの成果が得られた。



図 3-2 B 区で確認された奈良時代の掘立柱建物（左）と大溝（右）



図 3-3 B 区で確認された大溝（左）と船着場とみられる石組み（右）

（３）史跡指定地における発掘調査の成果

（公財）八尾市文化財調査研究会による区画整理事業に伴う発掘調査、基壇を確認した国庫補助事業による調査、さらに平成 30（2018）年 2 月の史跡指定後、同年 8～10 月、令和 2（2020）年 8～11 月、令和 3（2021）年 4～9 月、令和 4（2022）年 5～7 月に八尾市教育委員会（令和 3 年度からは八尾市）では塔基壇の状況を把握するために 4 次の発掘調査を実施した。これら一連の調査により、塔基壇の規模や構築に関わる工法や指定地内の状況が確認できた。

基壇の概要 基壇は、粘質土と砂質土の薄い層を交互に突き固めた丁寧な版築工法^{はんちく}で築かれ、

現状では一部で高さ約70cmが残っていた（図3-6中段）。残念ながら塔心礎をはじめとする礎石は失われており、柱の位置や数は明らかではないが、上面に掘りこまれた後世の土坑から、四天柱または側柱の礎石の可能性がある巨石や円柱座をもつ礎石（図3-6下段）を確認している。また、和同開珎や萬年通宝、神功開宝などの錢貨（図3-11）、さらに佐波理鋇の破片（図3-12）など鎮壇具と考えられる出土品がある。

基壇外装の地覆石や羽目石、延石などは抜き取られていたが、凝灰岩の破片を含んだ溝が四方にめぐることから、一辺約21mの正方形の基壇に復元することができる（図3-8）。これは、諸国の国分寺の規模をしのぎ、七重塔を有した大安寺（奈良県奈良市）の塔基壇に匹敵することから、塔は七重塔であった可能性も考えられる。

塔倒壊時に周囲に転落したと考えられる大量の瓦は、奈良時代後半に限定できる軒瓦が占める割合が高い。平城宮や西大寺をはじめとして、摂津金寺山廃寺や四天王寺、安芸国分寺、下野薬師寺など各地の同范、同系統の瓦が見つかり、官営寺院としての由義寺を考える重要な資料である（図3-9・3-10）。瓦とともに、塔頂部の相輪の一部である伏鉢もしくは請花の可能性もある復元径約90cmの銅製品（鍍金されていた可能性が高い・図3-13）が出土している。



図3-4 塔基壇の検出状況（上が北・白線が塔基壇の復元位置）



基壇西辺の大量の瓦を含む整地層



凝灰岩の破片を含む南北溝

図3-5 基壇の検出状況（その1）



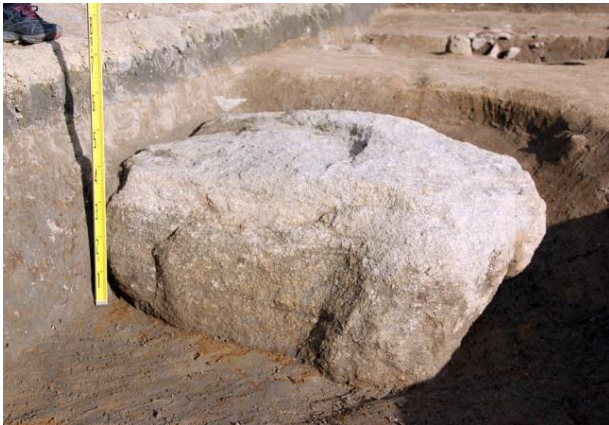
基壇の検出状況（北端）



基壇の検出状況（東端）



基壇の版築（同一壁面：右は下層確認後）



基壇内の土坑から出土した礎石と考えられる石材

図3-6 基壇の検出状況（その2）

下層基壇の確認 令和4（2022）年度の基壇東辺の調査において、これまで確認していた基壇の下層で、前身の基壇（「弓削寺」の可能性：東西約17.1m、東西規模は不明）が存在することを確認した。ひと回り小さい基壇を含む範囲を再整地し、その上に一辺21mの基壇を構築したことがわかった（図3-7・3-8）。規模が未確定のため、この基壇の性格は明らかでないが、下層の基壇から取り外された凝灰岩製の基壇化粧石を確認しており、切石積もしくは壇正積基壇であった可能性がある。



図 3-7 下層基壇の検出状況（左）・下層基壇の基壇化粧石（右）

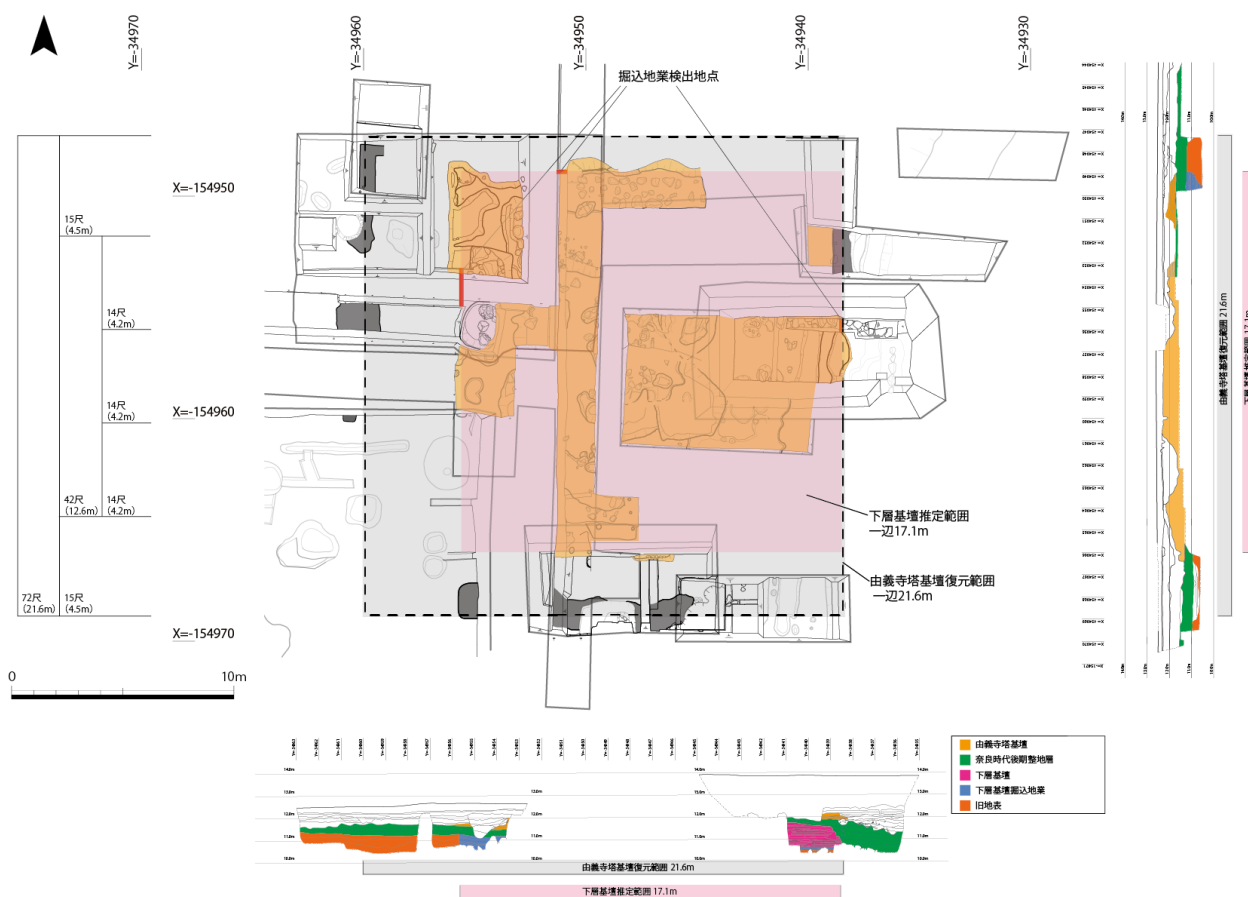


図 3-8 塔基壇遺構平面図（破線は塔基壇の復元ライン）

塔基壇周辺の状況 史跡指定地内の調査においては、寺院に関する遺構は塔基壇以外に確認していないが、史跡指定北東端（第2・3次調査）において、東西方向に集積する奈良時代後期の瓦だまり（東西 8.65m・南北 2.7m の範囲）を確認した。建物遺構は未確認だが、付近に寺院建物の存在の可能性がある。また、史跡指定地西辺付近（第2次調査）においては、塔建立

と同時期とみられる土器群が出土しており、塔建立時期の寺院経営に関わる活動の一端を知ることができた。



細弁十二弁軒丸瓦（西大寺系）



複弁八弁蓮華文軒丸瓦（興福寺式）



均整唐草文軒平瓦（東大寺系）



均整唐草文軒平瓦（興福寺式）



複弁八弁蓮華文軒丸瓦（河内国分寺と同範）



均整唐草文軒平瓦（四天王寺と同範）



重郭文軒平瓦（難波宮式）

図 3-9 史跡由義寺跡の出土瓦



図 3-10 出土した瓦



図 3-11 銭貨



図 3-12 佐波理銃



図 3-13 伏鉢もしくは請花と考えられる銅製品（発掘調査報告書より）

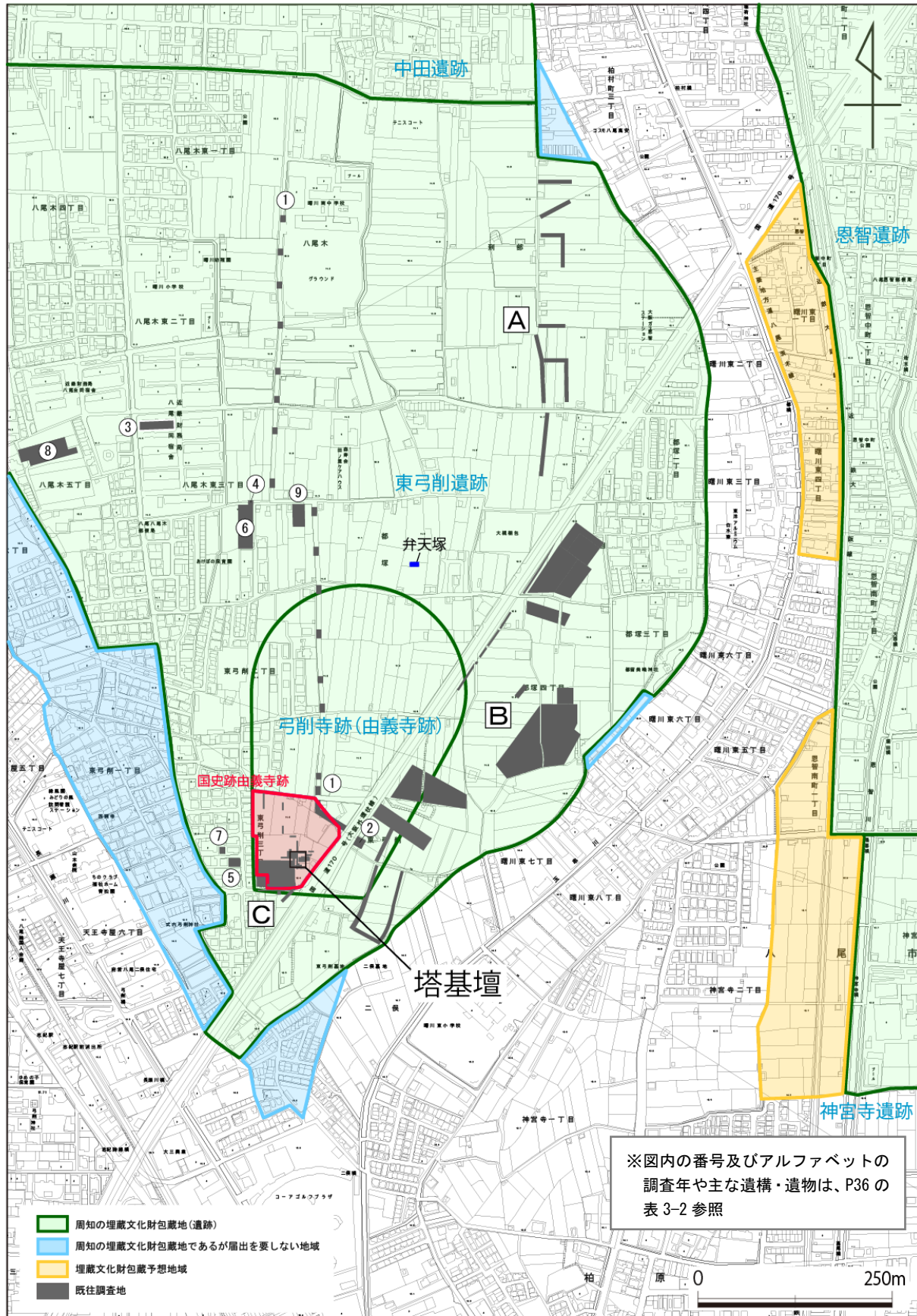


図 3-14 既往の発掘調査位置図

表 3-2 由義寺跡及び周辺の既往調査

既往調査一覧（奈良時代関連）			
番号	調査名	調査年	主な遺構・遺物
①	府水道部送水管布設工事	昭和 50 : 51 年 (1975・1976)	弥生～鎌倉時代の遺構、遺物、 <u>奈良～鎌倉末期の瓦、凝灰岩を含む整地層</u>
②	東弓削遺跡第 2 次調査 (1986-280)	昭和 61 年 (1986)	水田遺構、整地層、 <u>奈良～鎌倉時代末期の瓦</u>
③	東弓削遺跡第 3 次調査 (HY87-3)	昭和 63 年 (1988)	弥生～近世期の遺物
④	東弓削遺跡 (93-298)	平成 6 年 (1994)	弥生中期後半～鎌倉時代後半の遺物、 <u>奈良末～平安時代初頭の瓦</u>
⑤	東弓削遺跡 (98-572)	平成 11 年 (1999)	平瓦、丸瓦を多量に含む中世期の落ち込み
⑥	東弓削遺跡 (2003-150)	平成 15 年 (2003)	弥生中期後半、古墳後期、 <u>飛鳥、奈良、平安、中世期の遺物</u>
⑦	東弓削遺跡 (2006-17)	平成 18 年 (2006)	瓦、瓦器を含む河川堆積層
⑧	東弓削遺跡 (2008-461)	平成 21 年 (2009)	<u>奈良時代後期の土器棺墓</u>
⑨	東弓削遺跡 (2012-213)	平成 24 年 (2012)	<u>奈良時代末～平安時代初頭の作土層</u> 、中世期の河川堆積
[A] [B]	区画整理事業に伴う発掘調査 東弓削遺跡第 24～28 次調査 (HY2015-24、2016-26、 2016-27、2017-28) 弓削寺跡第 3～7 次調査 (YGT2015-3、2015-4、2016-5、 2016-6、2017-7)	平成 27～30 年 (2015～2018)	弥生時代：溝、土器埋納遺構 古墳時代：土坑、溝、自然流路、家形埴輪 <u>奈良時代：柱穴群</u> 、中世～近世：耕作跡
			古墳時代：溝、形象埴輪 <u>奈良時代：溝、井戸</u> 中世：柱穴、曲物・石組み・桶枠等の井戸、土師器 皿埋納土坑 中世～近世：耕作跡
[C]	東弓削遺跡第 27 次調査 (HY2016-27) 東弓削遺跡・弓削寺跡 (2015-347) の調査	平成 28 年～ 平成 29 年 (2016～2017)	<u>中世期の整地層及び瓦積み井戸等から奈良時代後半の瓦が出土</u> <u>(由義寺跡塔基壇発見の端緒となる調査)</u>
	国史跡由義寺跡第 1 次発掘調査	平成 30 年 (2018)	<u>塔基壇の範囲等の確認調査：塔基壇の構築に関わる土層を確認</u>
	国史跡由義寺跡第 2 次発掘調査	令和 2 年 (2020)	<u>史跡指定地内の確認調査：指定地北東部に奈良時代後期を中心とする瓦の集積（瓦だまり）を確認</u>
	国史跡由義寺跡第 3 次発掘調査	令和 3 年 (2021)	<u>瓦だまり及び塔基壇の追加調査：昨年度確認した瓦だまりの広がり、塔基壇南辺の遺存状況を確認</u>
	国史跡由義寺跡第 4 次発掘調査	令和 4 年 (2022)	<u>塔基壇の追加調査：塔基壇東辺の遺存状況を確認し、下層で弓削寺の基壇を確認した。</u>

※下線：奈良時代の遺構、遺物に関する内容



図 3-15 史跡指定地（赤線の範囲）及び周辺における既往調査位置図

(4) 由義寺の境内地の検討

国史跡に指定された由義寺跡の範囲は、広大な寺院を有したとみられる由義寺の境内地の一部で、塔以外の伽藍を構成する建物の場所や規模、寺域は明らかになっていない。由義寺や同時期にあったとみられる由義宮については、史料からも特定の場所を絞り込める材料が少なく、古くから地名や地形等をもとにして類推されてきた。

発掘調査で塔基壇を確認した場所の小字は「古屋敷」にあたる。その北側には「大門」、「古宮」、「北口」、「堂ノ後」の小字などが残っており、寺院や宮の存在を示唆するものと考えられる。このあたりの現状は田地で、寺院建物を示すような地割や基壇を示す高まり等は認められない。しかし、史跡指定地北東部において発掘調査で確認した東西方向に広がる瓦だまりは、周辺に塔とは別の施設の存在を示唆している。

由義寺の塔は、同時代の東大寺や大安寺、西大寺のように、金堂や講堂などの中心伽藍の南側に塔院として独立した東西に並ぶ双塔のうちの二塔の可能性もある。しかし、周辺の発掘調査では東西どちらかで塔の存在は明らかになっていない。南北に流れる2つの河川（玉串川・長瀬川）に挟まれたほぼ中央に位置する塔基壇の位置や周囲の字名から、単塔の可能性もある。

由義寺の境内地が広がると想定される史跡指定地に隣接する北側は、市街化調整区域で、原則、開発事業が行われない。将来的には発掘調査で寺域の広がりを確認し、伽藍配置を復元する必要がある。

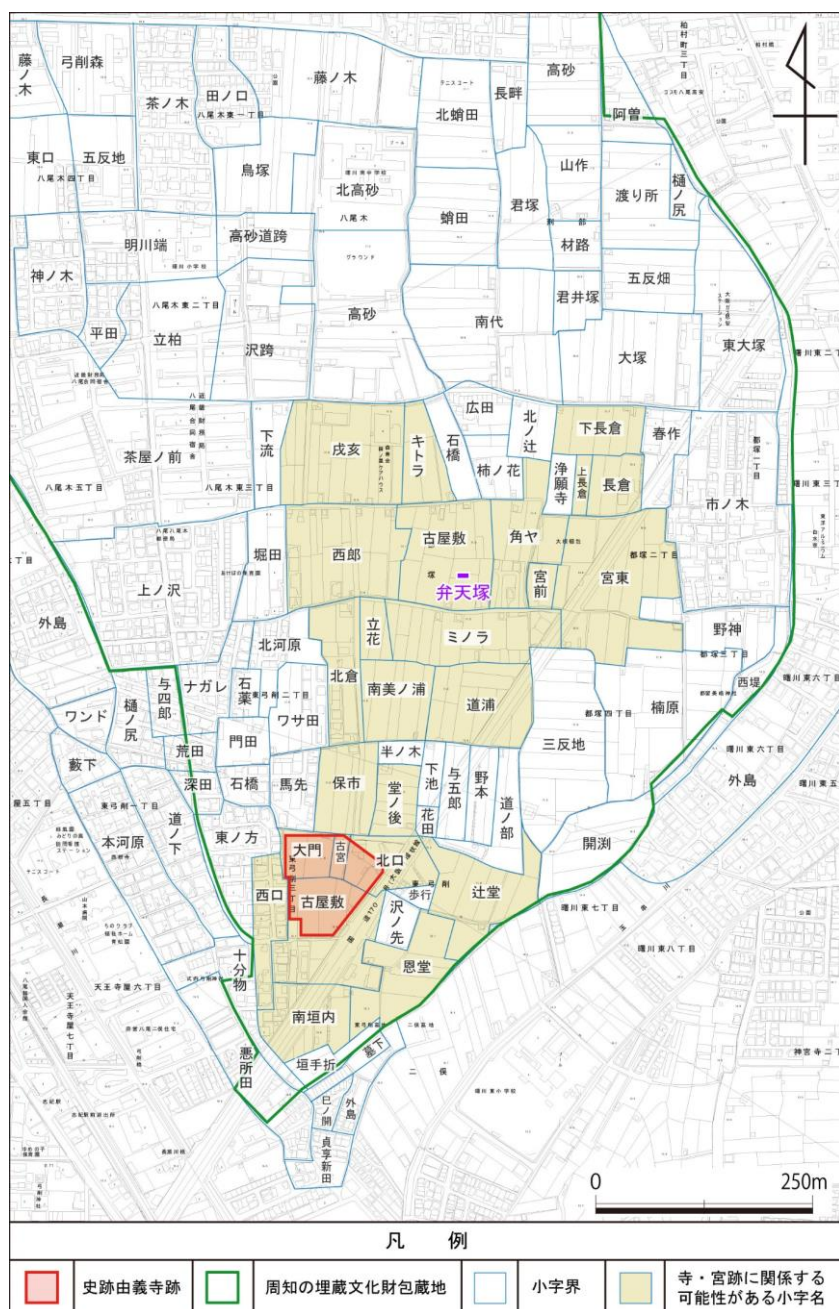


図 3-16 寺・宮跡に関係するとみられる小字名